

シンポジウム

《μηδὲν ἄγαν デルポイからのメッセージ》

報告者

中務哲郎
中畑正志
本村凌二

コメンテーター

平田松吾
栗原裕次
桜井万里子

司会・コーディネーター

安村典子

趣旨

「メーデン・アガン」(μηδὲν ἄγαν, 度を過ぎすなかれ) という箴言がデルポイの神殿に刻まれていた。これは何を意味するのか。この倫理規範の存在は、心の底から沸き上がる激情を、古代ギリシア人が驚きの心をもってとらえ、これについて問い、顧み、吟味し、そしてその激情を理性によって制御することをよしとした、ということであろう。

デルポイの神殿には、他に二つの箴言 (γνώθι σεαυτόν, 汝自身を知れ) と (ἐγγύα πάρα δ' ἄτη, 保証、その傍らに破滅) も刻まれていた。とりわけ前者、すなわち「自己を知る」という問題と「度を過ぎすなかれ」という倫理規範の間には、深い思想的関連があると思われる。

本シンポジウムでは、「自己とどのように関わるのか」という問題を主軸とする、文学・哲学・歴史の三分野からの報告を行い、これに基づいて全体討議を行いたい。

ΜΗΔΕΝ ΑΓΑΝ : 箴言のはじまり

中務哲郎

Γνώθι σεαυτόν, μηδὲν ἄγαν, ἐγγύα πάρα δ' ἄτη. 「汝自身を知れ」「度を過ぎすなかれ」の二つ、あるいは「保証、その傍らに破滅」を加えた三つの箴言がデルポイの神殿に刻まれていたことは広く知られている(Plat. Prot. 343A, Diod. Sic. 9.10.1 etc.)。しかし、何度か火災に遭っているデルポイの神殿のどこに、何時、誰の手によってこれらが刻まれたかは不明である。プルタルコスには三つの箴言を刻したのはデルポイの隣保同盟の人々であると記し(De garr. 511A)、プラトンは

二つの箴言を七賢人の合作と語っているが(Prof. 343A)、μηδὲν ἄγανの作者としてはミレトスのタレス、ミュティレネのピッタコス、スパルタのキロン、アテナイのソロン、テゲアのソダモス(不明)、ソシアドス(不明)らの名が伝えられて定まらない。

μηδὲν ἄγανの文献初出は前6世紀のテオグニスであるから、これは言葉としてはさほど古くない(『エレゲイア詩集』219f.「市民らが動揺していても心配しすぎることはない。キュルノスよ、私のように中道を行くがよい」。335f.「熱心にやりすぎるな。万事中ほどが最上だ。そうすればキュルノスよ、得難い徳を手に入れるだろう」。401f. 657f.「困難に遭って心中嘆きすぎず、幸運に会って喜びすぎるな。万事耐えるのが善き人の持ち前なのだ。)。しかし類句はこれ以前から現れている。μέτρον ἄριστον(程々が最善)は七賢人の一人クレオプロスの言葉とされ、パロスのエウエノス(前5世紀後半)のエレゲイアに見える(2 West「多くなく、また少なすぎぬのがバックスの最善の程あい。(足らぬと)悲しみの、(過ぎると)狂気の因となる」)。ピッタコスの言葉とされるものには καιρὸν γνῶθι(好機を、程よさを知れ)がある。さらに、七賢人が活躍した時代から百年余り古いと考えられるヘシオドスにも μεσότης(中庸)を説く章句が頻出し、μηδὲν ἄγανと意味内容を同じくする表現も見える(『仕事と日』40「半分は全部より多い」、694「μέτρα 程々を守れ。何事につけ καιρός 適度が最善だ」)。

程々を守らず、人間の限界を踏み越えて、ὑβριςに陥れば ἄτηを引き寄せる、というのはギリシア人の最も基本的な倫理思想であった。天を目指したベレロポンテスやイカロスやパエトンの神話を思い出せばよい。ὑβριςへの警告は抒情詩人のテーマとなり(アルクマン fr.1『乙女歌』16f.「人たるもの、天に翔りゆくな、アプロディテと結婚しようなどとするな」、ピンダロスとアイスキュロスが繰り返して行った。

μηδὲν ἄγανは民衆知であったものが七賢人に帰せられ、デルポイの神殿に刻まれることによって規範となったと考えられるが、二つの箴言を続けて読むと、己を知りすぎることもよくないことになる。現に『縛られたプロメテウス』は、死の運命を知り得ぬことを人間の幸せと見ている。このギリシア人が、やがて自己を知ることが何よりも重要だと考えるようになるのはどうしてか。ペルシア戦争後のアテナイの隆盛、ヘロドトスによる戦争原因と世界の探究、自然学から人間研究に転じたソクラテスの活動などをキーにしてこの問題を考えてみたい。

MΗΔΕΝ ΑΓΑΝ からの逸脱

中畑正志

フランスの哲学者ミシェル・フーコーは、晩年の講義で主体や自己の問題を論じながら、おおよそ次のようなことを語っていた。古代ギリシア思想の中心には「自己への配慮」への勧めが存在していたが、近代になるとデカルト的契機=瞬間(le moment cartésien)のために「汝自身を知れ」という原則が支配するようになったのだ、と。

フーコーが「自己への配慮」として考えるのは、自分自身だけでなく他者と世

界に対する態度であり、さらに自己の変革を含む実践的なかわり方である。これに対してデカルト以後に支配的原則となったとする「汝自身を知れ」という原則は、自己認識（我思う）の明証性と確実性にもとづいて自己を真理の特権的な主体とするような考え方である。

もちろん、こんな箴言の扱い方はあまりに乱暴である。実際に古代の文献に目を転じれば、「汝自身を知れ」 γνῶθι σεαυτόν という箴言は、同じくデルポイに献上されたと伝えられる「度を過ぎすなかれ」 μηδὲν ἄγαν としばしば対のように言及されており、その意味もある程度まで似通ったものと受け取られていたと考えられる。それは、基本的には、個々人が神に対してまた社会関係のなかで自らの分をわきまえよ、といった意味だ。デカルト的な自己知の特権的明証性などとはおよそ関係がない。むしろ神を含めた世界との関係において自分の位置を理解することであり、いわば世界や他者との関係を本質的に含むような自己の知、その意味で反デカルト的とも言える自己知である。「度を過ぎすなかれ」が主として説いている感情などの制御もそのような社会的かわりのなかで理解されるだろう。

だが、古代においてこの二つの箴言の扱いは必ずしも均等ではなく、時代を下るに連れて「汝自身を知れ」のほうが、はるかに多く論じられることになる。もともとこちらの箴言のほうが思想的な包摂力を備えていたと言える。「自己自身」そしてその「知」という重要な表現にいずれもさまざまな想念を与えることができたからだ。とりわけプラトンの著作では、二つの箴言が並べて提示されることもあるが、「汝自身を知れ」が単独で取りあげられて独特の取り扱いを受けてもいる。それは、自己自身およびそれにかかわる知についての反省の作業であるが、そのなかでは「汝自身を知れ」が「度を過ぎすなかれ」と連携していた思想圏から逸脱していくような思考を観察できる。そしてそれが同時にフォーコー的な意味を含めた「自己への配慮」という勸告を形成していく過程でもあった。

こうしたプラトンの議論は、箴言「汝自身を知れ」の広範な受容に確実に影響を与えた。ただしプラトンを経由したのちの時代においても、この箴言自体の理解、そしてこの箴言をめぐるプラトンの議論の解釈はともに一様ではなく、むしろかなりの相違が観察できる。

この報告では、「汝自身を知れ」の解釈と受容に大きな役割を果たした『アルキピアデス I』などのプラトンの作品を手がかりに、「汝自身を知れ」と「度を過ぎすなかれ」との距離を一つの物差しにしながら、古代的な自己自身とのかかわり方——その特質と変容過程——を考察したい。

エピクロス派とストア派の狭間で
——ヘレニズム世界からローマ世界へ——

本村凌二

おそらくヘレニズム期の地中海世界は人類史上はじめてのグローバル化がおこった時代ではないだろうか。宗教史家の M・エリアーデはヘレニズム世界を農業革命（農耕の開始）と産業革命（工業化）に匹敵する未曾有のシンクレティズムの時代だと指摘している。

このような混迷をきわめる時代に、人々はいかにしたら心すこやかに生きられるかを問いつづけたにちがいない。なかでもエピクロス派とストア派は、ヘレニズム期からローマ帝政期にいたる地中海世界にあって、生活倫理の拠り所をほめかすものだったように思われる。

これらの思想のなかでも、神々と人間世界の関わりについての相違は、それぞれの生き方を考える上でかなり重要な要因であったのではないだろうか。古代世界においては神（神々）の存在を否定することなど誰であれほとんど思いつきもしないことだった。ただ神々が自然と人間の世界にいかなる力をおよぼすかをめぐっては様々な考え方があったにすぎない。

単純にながめれば、エピクロス派は神々の世界は人間の世界と隔絶していると考えられる。そのように見なせば、神々の力は人間にとって、善でも悪でもない。だから、人間はできるだけ快適にのびのびと生きればよいのである。

これに対比すれば、ストア派は神々の力は自然と人間の世界のあらゆる所に及ぶと考える。だから、神々の摂理にできるだけ従って生きることが肝要になる。そうすれば、隣人あるいは周囲の人々への配慮は欠かせない心構えになる。

かつて古典期にあって、プラトンは個人にとっての善は共同体にとっても善であることを目指した。アリストテレスが「人間は自然本来的にポリスの動物である」と指摘したことはつとに名高い。

ところが、エピクロス派は「人間は共同体生活を営む“自然的”傾向をまったく持っていない」と考える。富、地位、身体資質、政治力（男>女、ギリシア人>他民族、奴隷制度）のごときものは無視されがちであった。このため、彼らは個人主義的な生き方を求めてやまない。

これに対して、ストア派は自己保存を自然なものにとらえ、万物にやどる理性（ロゴス）に合致した徳を善としてことさら重視する。そこから、公務への参加を当然のものに見なし、ポリスを越えてコスモポリタンな生き方を唱えるようになる。

個人主義と世界市民主義。空前のグローバル化の世界にあって、エピクロス派とストア派は心豊かに生きる道を求めながら、両極の目標にたどり着いたことになる。しかし、現実には生きる大多数の人々にとっては、その狭間で生きることしかできなかったのではないだろうか。そこでは中庸としての *μηδὲν ἄγαν* が身に迫る問題として感じられたにちがいない。

ここでは、精神史あるいは思想史という立場からではなく、社会史の中軸をなす心性史という観点から当時の人々の生き方を考えてみたい。それは今日の世界にあって、いささかなりとも示唆するものがあるのではないだろうか。